

Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2007

世界ガールズ白書 2007 年版 サマリー

「Because I am a Girl 世界ガールズ白書2007」は、子ども時代、思春期、青年期と成長していく過程における女の子の権利を詳細に見ていくプランの年次報告の第1弾となる。この白書は世界の女の子の現状に関する総合的な調査結果を提供するものであり、今後発行される白書では、女の子の権利に対する侵害の具体例と、彼女たちを守るための仕組みに焦点を当てていく。

「この調査では、平等で公正な世界を構築することに失敗したためにもっとも容認しがたい状況が生まれたことが明らかにされる。性とジェンダーに基づく差別は、人道上、弁解の余地はない。経済的にも、政治的にも、社会的にも容認しがたいことだ。ジェンダー平等なくして、ミレニアム開発目標はどれひとつとして達成することができない。これ以上時間を一秒たりとも無駄にすることがあってはならない。今、断固として行動しなければ、何百万人もの女の子を貧困と苦難の人生へと追いやることになってしまうのだ」

グラサ・マシエル

女の子は不当な仕打ちを受けている。ジェンダーと年齢による二重の差別に直面しており、多くの社会で社会的・経済的地位の最底辺にいる。理論上、女の子は兄弟たちと同じ権利を持っているはずだが、実際には世界の多くの地域で、そうした権利を享受できずにいるのだ。

もっと女の子のために——8つの行動計画

この行動計画は女の子の権利のための長期的な課題であり、幅広い分野を網羅しつつも、各国の事情により大きく異なる。

1. 女の子の声に耳を傾け、参加することを促す。女の子は自分の権利についてはっきりと発言し、守る能力を秘めている。この白書では、非常に困難な状況から立ち上がりつつ

ある若い女性の声を、いくつか実例として紹介している。女の子と若い女性の声は聞き届けられなければならない。

2. 女の子と若い女性に投資する。女の子と若い女性が権利を守るためには、あらゆる階層で十分な資金が入手できなければならない。彼女たちのニーズは、年配の女性や男の子、男性とは異なる場合が多いのだ。

3. 法律を変え、施行する。多くの国では、女の子と若い女性に関する差別的な法律や慣習がまかり通っている。そうした国では、地域に実効性のある形で、人権に根ざした法律へと改正する必要がある。女の子と若い女性を守る法律が既に存在する国では、それを強化する。

4. 意識を変える。女の子の現状は、男の子と男性を含むすべての人々のジェンダー平等への意識が変わればもっと迅速に改善する可能性が高い。女性が二等市民とみなされている限りは、女の子と若い女性はその能力を存分に発揮できる日は来ない。

5. 女の子のためのセーフティネットをつくる。もっとも貧しく、もっとも脆弱な女の子とその家族は、就学支援や補助的栄養食品に使える定期的で計画性のある助成金、奨学金、給付金などの総合的な社会的支援の恩恵を受けることができる。

6. 女の子に関する詳細なデータを集める。この白書のために調査を実施する過程で、女の子と若い女性に関するもっと詳細なデータが緊急に必要だということが判明した。統計や資料は子どものみ、あるいは女性全般についてのみ収集されている。政策決定者は、性別と年齢別に集めた全国規模のデータを収集し、活用すべきである。

7. ライフサイクル・アプローチを実施する。この白書では、ライフサイクル・アプローチによって女の子の権利向上に取り組めば、女の子が生まれてから（あるいは生まれる前からでも）成人女性になるまでのあらゆる段階で差別に取り組んでいけることを示している。このアプローチにより、女の子のライフサイクルを通じて暴力などの問題の蔓延を知り、女の子の人生においていつがクリティカルな時期なのかを特定することができるようになった。

8. 良い事例を学び、記録し、共有する。この白書のための調査では、若い女性の人生について、そしてその人生を改善していく方法について、いかに知られていないかが明らかになった。女の子の権利に関しての好例やお手本となる事例を、体系的に記録し、実践していくことが求められる。今後発行されていく続編の白書では、具体的な領域を取り上げ、詳細に見ていく。

女の子は生まれる前から既に差別に直面している場合がある。世界の一部地域で女の子の中絶という慣習が広まりつつあるため、1億人を超える女の子と女性が失われていると推測される。差別は女の子の人生の各段階に存在する。家庭でも、学校でも、職場でも差別は行われるのだ。男の子に優先的に食事を与える習慣は女の子の栄養不良につながり、その後ずっと女の子の心身の健康に影響を与える。女の子は教育を受ける機会も少なく、ジ

ジェンダーに基づく暴力の被害者となる危険が高く、経済的・性的搾取の対象となるリスクも高い。性に関する判断を女の子が下すことができない場合が多いため、サハラ以南のアフリカではHIVに感染している15～19歳の3分の2が女の子である。

あらゆる社会に蔓延するジェンダーによる差別は女の子、特にもっとも貧しく、もっとも疎外されたコミュニティに住む女の子や、不安定な時期、災害時の女の子が、本当に不利な状況に置かれていることを意味する。こうした女の子が貧困と差別、搾取の連鎖から逃れられる可能性は非常に低い。

明らかに女の子の進歩が阻害されているという現状がこのまま続けば、世界中の政府がミレニアム開発目標を達成することはできない。女の子は娘として、母として、妻として、姉として、学生として、そして労働者として、本当に貢献することができるのだ。全国民に対する教育の推進なしに貧困を脱した国はいまだかつてなく、女の子と母親に投資すれば幸福のあらゆる指標も改善されていくことは明確に証明されている。

近年、ジェンダー平等と女性の権利については進捗が見られており、平等を推進して女の子を保護するための国際法が策定されているにもかかわらず、世界はまだ女の子への約束を果たせていない。いくつもの国際法、たとえば「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約(CEDAW)」や「国連子どもの権利条約(UN CRC)」がジェンダーによる差別を禁じている。こうした国際法の多くが国家の法律に転換されているが、実際に全国的に施行されているかと言うとそうとは限らない。特に顕著な例が、女の子を早すぎる結婚から守る法律だ。同時に、差別的な法律や慣習がいまだに存在し、そちらのほうが厳しく適用されている場合も多い。

女の子の平等を達成する上で肝要なのは、意思決定と一般生活における女の子の参加だ。女の子個人や女の子のグループ、女の子と女性の大きな運動が差別に立ち向かい、自分たちの権利を守ろうと立ち上がった例は無数にある。こうしたイニシアティブには支援が必要なのだ。

女の子はなぜ差別に直面するのか？

女の子は、女性であること、そして若いということで二重の差別に直面する。このため、人生における重大な判断を自分で下す機会がほとんど与えられない場合もあるのだ。女の子に対する差別は、女性と男性の生物学的な違いが女の子に権利と機会、発言権を与えない行為を正当化するという考えのもと、数々の伝統や規範に根差している。これは組織的であり、広く容認されている。西アフリカでプランの依頼により実施された最新の調査では、ジェンダーに基づく暴力などの蔓延は、女性と男性、女の子と男の子の間の不平等に深く根ざしていることがわかっている。

女の子が差別に直面する5つの重要な問題

- ・存在の否定。これは女兒中絶、出生登録の不提出、そして女の子の存在を無視し、参加を阻害するような社会環境を含む。

- ・能力。これは女の子があらゆる権利を享受する力に影響を与える。女の子の能力は、ジェンダーに基づくネガティブな固定観念を広めてしまうような教育カリキュラム、そして家庭内で男の子に優先的に栄養を与える習慣によって阻害されてしまう。

- ・身体的・精神的差別。ここにはジェンダーに基づく暴力や人身売買、一時的な結婚、そして女の子の性的行動に対する批判的態度のために避妊手段が取れなかったり医療機関に行けなかったりする現状が含まれる。

- ・家族と家庭の責任。ここには女の子が結婚する最低年齢の低さ、そして労働する女の子、特に家事労働に従事する女の子の性的・経済的搾取も含まれる。

- ・地方および国の慣習や伝統。ここには地域に根ざした、宗教、司法、宗教以外の伝統が含まれる。これらは相続の不平等や、法制度の中での女の子への差別を容認するものである。

ジェンダー平等と女の子へのもっと正当な対応を達成するためには、社会全体に深く根ざす意識に異議を申し立てる必要がある、女の子の教育への資源配分に向けた新たな気運が必要である。インドのハリヤナで実施されている画期的なプログラムでは、家庭内で女の子に期待される価値を向上させ、早すぎる結婚を阻止することを狙いとしている。女の子が生まれると、地元政府がその子の名前で小額のお金を口座に入金する。その女の子が18歳までに結婚していなければ、その金額に利息が加わった総額を受け取ることができるのだ。

幼いころから始まる差別

女の子に対する差別は生まれたときから、あるいはもっと早くから、世代を越えて受け継がれてきた意識や行動パターンを通じて始まっている。この白書が示すように、女の子の低い社会的地位は、女の子が大きくなるにつれその健康と幸福に、そして自身が子どもを持つときにはその子どもにも影響を与えてしまう。5歳までに、ほとんどの男の子と女の子は家庭や学校、メディア、社会全体が教えこむジェンダーの役割に順応してしまう。そうするとその次の世代も、同じことを繰り返す可能性が高い。女の子の権利を保護し、促進する目的で策定された国家的・世界的な法的基準がいくつも確立されるという進歩にも関わらず、ジェンダーや女の子と男の子の価値といった文化のおよび社会的通念は、これまで以上に克服が難しくなっている。

多くの国、特に南アジアと中国では、男の子が生まれると祝福されるが、女の子が生まれると同情の言葉がかけられる。結婚持参金の習慣によって娘の両親が金銭的出費を強いられる地域ではなおさらだ。この大きな要因としては、文化によっては男の子は成長すると

両親の面倒を見るが、女の子は別の家庭へ嫁入りしていくため、両親にとっては経済的な負担が大きいと見られがちである。

家庭は、子どもが最初に自分の可能性について知る場である。何百万人もの女の子が自分は男の子よりも社会的地位が低いのだと思うように育てられるのも家庭である。女性自身、女の子と男の子がまだ幼いうちにそうした知識の大半を伝えていく役割を果たしている。女の子が持てる権利を享受し、男の子と同じ機会を得られるようにするためには、家庭内での意識改革が必要となる。

思春期の難題

女の子の社会的地位は、その人生のすべてに影響をおよぼす。とりわけ、女の子から女性へと移行する時期にはその影響が強く表れる。この時期は、その先の人生を形づくる選択が行われる時期でもある。特に教育は、質が高く、無償で、女の子にやさしい教育施設があれば、女の子の人生を大きく変えることができる。いくつもの学術研究や全国規模・世界規模のイニシアティブ、現地プロジェクトが女の子の教育の重要性を証明しているのだ。最近の研究では、5歳未満の死亡率と、子どもの母親が受けた教育のレベルとの間に驚くほどの関係性があることが判明した。この領域での進歩は目覚ましいものである。小学校レベルでの就学率が近年向上していることで、女の子は特に恩恵を受けている。

世界でもっとも貧しい国々に暮らす何百万人もの女の子の現実には、男の子よりも多くの時間を家事などの非経済活動に費やさなければならず、そのために教育や娯楽に費やせる時間が少ないというものだ。女の子から女性への移行期は、それ自体が女の子にとって難題となり得る。女性性器切除などの成人儀礼は、女の子の権利を侵害する慣習だ。10代やそれ未満での結婚と早すぎる妊娠は通常、女の子の教育を受ける権利と能力発揮の機会に有害な影響を与える。

「女の子に対するこの非人道的な行為を止めるためには、早すぎる結婚の習慣を禁止する厳しい法律が施行されるべきです。政府と市民社会の両方が、すべてのコミュニティにおいてジェンダー平等や早すぎる結婚の悪影響に関する意識向上キャンペーンを立ち上げるべきです」

B. サヴィタ、14歳、インド

家庭は、女の子と男の子が安全を感じ、責任ある成熟した大人へどうやって成長していくかを学ぶ場であり、最初の人間関係を構築し、両親が示す良い模範を見習う場であるべきだ。しかし、実際には何百万人もの子ども、特に女の子が、暴力や虐待を受ける場でもある。この暴力の大半がジェンダーに基づくものであり、主に男性から女の子と女性に対して行われるものである。

女の子が大人へと成長していく中で、彼女が受けた教育の内容、あるいは教育を受けられなかったことが、人生のさまざまな場面で大きな影響を持つようになる。知識、情報、自信が女の子にHIV感染や搾取、危険な児童労働から身を守るすべを与えているという明確な根拠がある。若い女性が教育を受けていれば、その子どもは健康に育ち、学校へ行く可能性が高い。たとえば、学校に行かなかった母親の子どもが小学校を中退する割合はベネズエラでは4.8倍、スリナムでは4.4倍、ガイアナでは3.4倍になる。また、教育を受けた若い女性は収入を得られるようになる可能性が高く、それが家庭にも経済にも良い影響をおよぼす。調査によれば、女の子の小学校就学率が上がると、その国の1人当たり国内総生産も上がる事が分かっている。

効果的な方策は？

女の子にやさしい教育

- ・学校で子どもの保護を促進することで、特に女の子にとって安全な環境が保証される
- ・学校が安全で、女の子が男性教員と2人きりにならないこと、学校内外の照明がきちんと整備されていること、学校が子どもの家の近くにあることを保証する
- ・学校での教員や他の生徒からのセクシャルハラスメントや虐待を根絶する

中南米で実施されている女の子の教育プログラムについてグアテマラで最近行われた評価によると、こうした学校に通っている女の子は勉強を続けたがるようになり、若くして結婚する割合は低かった。

若い女性であるということ

女の子と女性は、これまでにないほど健康になっている。過去数十年の間に寿命は10年以上延び、出産率は下がってきた。特に中南米では、女の子と女性の健康の向上が目覚ましいほどだ。しかし毎年50万人以上の女の子と女性（その99%が南半球に住んでいる）が、いまだに妊娠関連の疾病で命を落としている。女の子と女性は男性よりもHIVなどの性感染症にかかる危険性が高い。性行為をいつどのように持つかについての決定権が、男性ほどない場合が多いからだ。富裕国の思春期の女の子は、不眠や自傷行為などの精神的問題に苦しんでいる。こうした女の子は、社会においてジェンダーに基づいて作り上げられた若い女性の理想像に合わない自分の外見にコンプレックスを感じているのだ。

この10年間で、特に裕福で経済が急速に拡大している国の若い女性の前には無数の可能性が開けてきた。今まで以上に多くの若い女性が賃金の支払われる仕事に就いており、一部の国ではそれまで伝統的に「男性の仕事」とみなされていた職業に就くようになっている。しかし、ほとんどの女の子と若い女性にとっては、彼女たちの存在が金銭的にも実質的にも経済に貢献できず、寄与できていないというのが現状だ。一日1ドル以下で生活す

る15億人のうち70%が女性である。働く女の子と女性は通常、家事に加えて仕事もしている。彼女たちの貢献には賃金の支払われない家事労働の他、伝統的な（女性の）仕事がある。その一例がインドのデーヴァダーシーと呼ばれる神殿売春制度で、家族が女の子を神殿で売春婦として勤めさせるために送り出すものだ。また、貧しい家計を支えるための賃金労働に従事する女の子もいる。女の子は搾取される状況に陥るリスクが高く、このために彼女たちを危険な労働から守る努力が必要となる。

「政府や NGO に助けを求めただけでなく、私たち自身も自分の権利を守る方法を見つけなければいけません。私たちがぶつかる問題をみんなで認識しましょう。他の人たちにいいように利用されてはいけません。立ち上がりましょう！ そして自分の権利のために闘いましょう！」

ステファニー、13歳、フィリピン

中には、二重、三重の差別に苦しむ女の子もおり、特に困難な状況にある女の子もいる。その理由は、家族が貧しく、家を出て通りで生き延びなければならぬからかもしれない。あるいは、先住民族や少数民族などの被差別グループに属しているという人種的背景からかもしれない。または、性的嗜好が異なるからかもしれない。なんらかの形で障がいを負っているからかもしれない。または紛争地域に住んでいる、難民や国内避難民になっている、孤児であるなどの状況によるものかもしれない。こうした状況すべてにおいて、女の子と若い女性はジェンダーに基づく差別ゆえに特に苦しい思いをしなければならない。

どうすればいいのか？

もっとも貧しく、もっとも脆弱な家族のために政府がごく少額の、定期的で計画性のある余剰資金を母親や祖母の手に直接渡すプログラムを導入しているところでは、その支援が女の子の福利厚生に良い影響を及ぼしている。メキシコ政府の「オポチュニダダス」プログラムは、男の子よりも女の子の就学率に大きな影響を与えた。バングラデシュの「教育のために現金を」プログラムでは、小学校の入学率が20～30%増加し、支援を受けた女の子も男の子も、他の生徒より平均2年間長く学校に通い続けるという結果を生んだ。

女の子の平等を目指して

「女の子は村ごとに組織を作って、教育や遊び、それに家庭内での意思決定に平等な機会を得られるよう主張するべきです」

ヴァンダナ、15歳、インド

人権というレンズを通して女の子が直面する困難を見ることで、女の子の人生に次々と立ち上がる非道な行為が明らかになる。プランは、女の子と若い女性の参加の促進、女の子への投資の増加、法の改正と施行、意識改革、最貧困層の女の子のセーフティネット、女の子についてのより質の高いデータ、そしてライフサイクル・アプローチやお手本となる事例を記録することの重要性を呼びかける8つの行動計画を提案する。

男の子と女の子の間の平等性は政治的意思、文化的変化、そしてジェンダー平等に尽力する社会があって初めて実現する。今こそ、こうした努力を支援するときである。子どもが生まれたときに、女の子だからというだけで差別を受けることのないように保証していくときなのだ。

女の子の人生にまつわる事実

生存：女の子は生まれる前、母親のおなかの中にいるときから差別される。世界の一部地域で行われている女児中絶などがその証明である。その結果、推定1億人の女性が「失われて」いる。

- ・毎年、1,050万人の子どもが5歳になる前に死んでしまう。そして開発途上世界では男の子よりも女の子のほうが死亡率が高いことが確認されている。
- ・開発途上国では推定4億5,000万の成人女性が、子ども時代のタンパク質摂取不足の結果、発育不良となっている。
- ・女の子は男の子よりも栄養状態が悪い。女の子は、男の子よりも下痢になる可能性が高い。

家族：母親は、自身が女の子・女性として経験した中から得た知識を次世代に伝えていく。

- ・多くの開発途上国では保護的な条例の施行がなかなか進んでいないため、何百万人もの女の子が早すぎる結婚の対象となり、教育や健康、経済的展望に対する内在的なリスクにさらされている。サハラ以南のアフリカでは15歳から19歳の女の子の60%が結婚している。
- ・世界中で1億4,000万人の女の子と女性が女性性器切除を受けさせられており、さらに毎年200万人の女の子がこの儀礼を通過している。

教育：健康と教育は大いに関連している。特に女性の教育に関しては、5歳未満の死亡率と、子どもの母親が受けた教育のレベルとの間に驚くほどの関係性があることが判明している。

- ・6,200万人もの学齢期の女の子が小学校に通っていない。これは、北米とヨーロッパの女の子を全員合わせた数よりも多い。
- ・女の子は虐待や暴力を経験したり、衛生施設が不十分だったりすると学校を去ってしまう。
- ・北半球では女の子の学業成績が向上しているにもかかわらず、比較可能な職業において女性は男性よりも賃金が低く、低賃金の雇用形態でいることが多い。

健康：妊娠関連の疾病は世界中の15歳から19歳の若い女性の主な死因となっている。毎年、妊娠関連の原因によって50万もの女性の命が失われている。

仕事：女の子と男の子が、幼いころからそれぞれのジェンダーに適しているとみなされる仕事について明確な意見を持っていることが判明している。

- ・家庭内児童労働者の90%が12歳から17歳の女の子であり、性的・経済的な搾取、暴力、虐待のリスクにさらされている。

特に困難な状況にある女の子：ジェンダーによる差別——教育、医療、食料、情報を十分に与えられない、コミュニティや社会に十分参加できない、家庭内での役割を決めつけられていること——は、女の子の成長と幸福をリスクにさらし、権利を享受できる可能性を低める。不安定で安全ではない状況では、こうしたリスクは増加する。

- ・20～50%の女の子が家族から暴力を受けた経験を持つ。

- ・先住民族や少数民族の女の子、そして障がいのある女の子は特に暴力や虐待の被害者となりやすい。

世界の女の子に、生きていく力を。

